

「私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください」

マタイ 6：13

堀田修一 22・8・21

- I 三位一体の神の役割分担。父と子と聖霊は、三つの神ではなく一つの神。共同の業と役割分担。
1. 父なる神。天地創造の主役：「私たちの日ごとの糧を、今日も与えてください」：11。
 2. 子なる神、キリスト。十字架の救い、贖い、罪の赦しのための完全な償いの主役：「私たちの負い目をお赦しください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」：12。
 3. 聖霊なる神。罪、悪の力への勝利、聖化の主役：「私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください」：13。
- II 本日は、「私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください」：13を深く味わいたい。これは主の祈りの最後の祈り。この祈りは、直前の祈りと対照の祈り。直前の祈りは、「私たちの負い目をお赦しください」。これは、私たちが罪を犯してしまったときにどうすべきかを教えている。私たちは罪を告白し、赦しを求めて祈る。本日の主の祈りの最後の祈りは、罪を犯す前に、どのように祈るべきかを教えている。私たちが罪を犯す前に、悪や誘惑から守られ、罪を犯さないように教える生涯祈り続けるべき大切な祈り。私たちが一日を始める前に、これほど必要な祈りはない。これを主は最後に教えられた。
1. この祈りの試練とは何か。「試み（試練）にあわせないでください」と祈ることは、一見、聖書の他のみことばと矛盾するように思われる。なぜなら、聖書は、試み、試練を信仰者にとり必要なもの、益となるものと教えているからである。ヤコブ1：2-4では「様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。…信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります」。このみことばは、色々な試練が信仰者には不可欠と教えている。試練は、私たちが成長（主の品性に似る。忍耐強さ）していくために、なくてはならないもの。それ故に、本日の祈りは、「いっさいの試練がないように」との祈りではないと分かる。使徒ペテロも言っている。「あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思っはいけません。むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい（神のご計画があり霊的な価値があると認め喜び）」I ペテロ4：12。試練を避けるのではなく、むしろ受け入れることが勧められる。なぜなら、信仰は試練により成長する。常に順調、順境なら、自分の無力さや真剣に神に頼ることを学ばず、成長しない。※証し。主を信じてからの48年→多くの試練の中での悔い改め、へりくだ

り、神に真剣に頼る事を学ぶ。神は、私たちの信仰が同じ状態に留まっている事を願われない。何事も起きないところでは、信仰はなかなか成長しない。それぞれ自分の信仰の生涯を振り返りたい。信仰は試練により成長すると実感させられる。聖書の中の信仰の勇者たちも試練により成長して行った。「神がアブラハムを試練にあわせられた」創世記22：1。神は、アブラハムをテストされた。神はアブラハムに、一人息子イサクをいけにえとして献げるように命じられた。アダムから主イエスに至るまでのすべての人が、試練を経験して来た。初代教会では、信仰者にとり試練とは迫害だった。今日私たちが経験する試練は、苦しみ、人間関係、悩み、病気、死である。自分が非常につらい苦しみや病に出会うとき、自分の本当の信仰が問われる。それらの試練をどう受け止めるか。神にどのように向き合うか。神に頼る信仰が深まるか。神への反発か。開き直りか。自己憐憫に沈むか。反応はさまざま。どんなに失望しそうになるときも、神に信頼し、神に正直に祈り、祈りの最後に神の最善のみこころに委ねる人は、その試練が見事に信仰の成長の糧となる。

2. この祈りの「試み」の真の意味とは。主イエスは、この最後の祈りで、信仰を成長させ、良い実を生み出すような試練について語っているのではない。この祈りの「試み、試練」は、信仰を押しつぶしてしまい、主から離れてしまうような、やけになり悪に突っ走りそうな「試練、試みにあわせないで」くださいという祈り。「耐えられない試練にあわせないでください」I コリント10：13と合致する。それは、主がこの祈りの後に続けておられる祈りからも理解できる。私たちが試みにあわせないで、「悪からお救い（原語：救う、守る、救い出す）ください」と祈るように教えられた。つまり主は、私たちが悪や罪に導いていくような「試み」にあわせないでくださいと祈りなさいと教えられた。13節の祈りの前半は否定的、後半は、肯定的。これは別々のことではなく、一つの祈り。13節の「試み」の原語には、「試み、試験、試練、誘惑」という意味がある。そのために、ある訳の聖書は、この13節が「わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください」と訳されている。しかし、この箇所を「誘惑」と訳すとヤコブ1：13の「だれでも誘惑されるとき、神に誘惑されていると言ってははいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することはありません」というみことばと矛盾することになる。このヤコブ1：13のみことばは、大変重要である。神は、ご自分で悪への誘惑をなさる方では決してない。「試みにあわせないでください」と祈るのは、私たちが、悪、罪に陥るような耐えられない試練を与えないで下さいの意味。

3. 誰が悪への誘惑をするのか。

①私たちが自身の心の中に悪に誘惑される罪の欲がある→「人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです」ヤコブ1：14。救われていても、この地上では私たちは完全ではなく、心に罪の性質が残っており、その罪の欲が私たちが悪に誘惑する。主も言われた。「人の心の中から、悪い考えが出て来ます。淫らな行ない、盗み（詐欺も）、殺人（戦争の殺人は人の心の罪の性質、支配欲から始まる）、姦淫、貪欲、悪行、欺き、好色、ねたみ、ののしり、高慢、愚かさで、これらの悪は、みな内側から出て来て、人を汚すのです」マルコ7：21-23。だから、私たちは、この祈りをささげるとき、まず、「自分の心の悪、罪の性質を御聖霊により聖め、悪から救い出してください」と祈り続けたい。

②大きな誘惑者が私たちの外にいる。それは、悪魔（中傷・誹謗する者）、サタン（反対者、敵の意）である。悪魔の誘惑に自分の力で戦って勝てる人はいない。悪魔の誘惑と戦うための神の武具がエペソ6：10－20に記されている。それをまとめると、神の大能の力により強められる・聖書の真理・みことばの正義・平和の福音・信仰の盾・救いのかぶと・御霊の剣＝神のことばの力・どんなときも御霊により祈る力・互いのために忍耐の限りを尽くし祈り合う力。「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです」マタイ26：41。「いつも油断せずに祈っていなさい」ルカ21：36。祈って奇蹟的に改善しても、油断せず祈り続ける。※証し。

③この世に悪がある。「キリストは、今の悪の時代から私たちを救い出すために、私たちの罪のためにご自分を与えてくださいました」ガラテヤ1：4。自分の心に悪があり、悪魔の悪の誘惑があり、この世の悪の誘惑がある。私たちは弱い。しかし、私たちの心に住んでいてくださる聖霊なる神は、私たちの聖化（主の性質に変えられ続ける）の助け主。「私たちはみな…主の栄光（ご性質）を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたち（ご性質）に姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主（神）の働きによるのです」Ⅱコリント3：18。本日の祈りも「私」ではなく、「私たち」を試みにあわせないで、悪からお救いくださいである。つまり、自分だけが守られるようにではなく、私たち＝教会の共同体の祈り。弱いお互いのために祈り支え合う主の祈り。何と主の祈りは素晴らしい祈りだろう！

祈り：自分の心に、悪魔に、この世に悪の力がああります。しかし、全能のあなたは、御聖霊とみことばと教会の祈りの支えにより守られます。本日の祈りを祈らなくて良い日はありません。主の祈り全体を日々、本気で祈らせてください！